

# 小学校英語活動を踏まえた中学校英語の入門期指導

奥山澄夫<sup>1</sup>

神奈川県立総合教育センターでこれまで行ってきた小学校英語活動の調査研究、調査研究協力員の中学校での実践、質問紙調査の結果及び先行研究から、これからの中学校英語の入門期指導では、小学校英語活動を通して育成されるコミュニケーション能力の一定の素地及び英語の学習意欲を大切にすべきであることが分かった。研究成果は整理して、研究成果物『小学校英語活動を踏まえた中学校英語の入門期指導』にまとめた。

## はじめに

平成 20 年 3 月に中学校の学習指導要領が改訂され、中学校では小学校における外国語活動との関連に留意して指導計画を適切に作成し、小学校との円滑な接続を図っていくこととなった。これは、小学校の第 5、6 学年に、それぞれ年間 35 単位時間の外国語活動が導入されることを受けたものである。

現在、多くの小学校は、新小学校学習指導要領が完全実施される平成 23 年度に向けて、外国語活動の授業時数を増やし、活動内容の充実を図るための取組みを進めている。神奈川県教育委員会（2009）が作成した「平成 21 年度『各教科等の指導の重点』中学校」には、中学校の外国語の指導について「指導計画の作成に当たり、特に第 1 学年においては、地域の小学校における外国語活動の指導や児童の実態などを把握するよう努める。」と記載されており、中学校には外国語活動を踏まえた第 1 学年への適切な指導に向けて早急な取組みを始めることが求められている。なお、外国語活動は、英語を取り扱うことを原則とすることから、以下、「小学校英語活動」という。

## 研究の目的

中学校第 1 学年の英語の授業では、小学校で音声面を中心にコミュニケーションに対する積極的な態度などの一定の素地が育成されることを踏まえて、身近な言語の使用場面や言語の働きに配慮した言語活動を行っていくことになる。しかし、Benesse 教育研究開発センター（2009）の報告によると、「小学校の英語教育（活動）について知っている」という項目に肯定的な回答をした中学校の英語教員の割合は 48.5%で、小学校英語活動について決して認知度が高いとはいえない状況である。今後、中学校の英語教員が小学校英語活動への理解を深めていくことが、小中の円滑な接続を図るために重要となる。

本研究は、小学校英語活動を経験した生徒の姿や中

学校での実践などに基づいて、小学校英語活動を踏まえた中学校英語の入門期指導に関する調査研究を行うことを目的としている。なお、本稿では、入門期を中学校入学時から夏季休業前までとする。

## 研究の内容

### 1 新中学校学習指導要領に基づく指導の在り方

#### (1) 新中学校学習指導要領の目標と重点

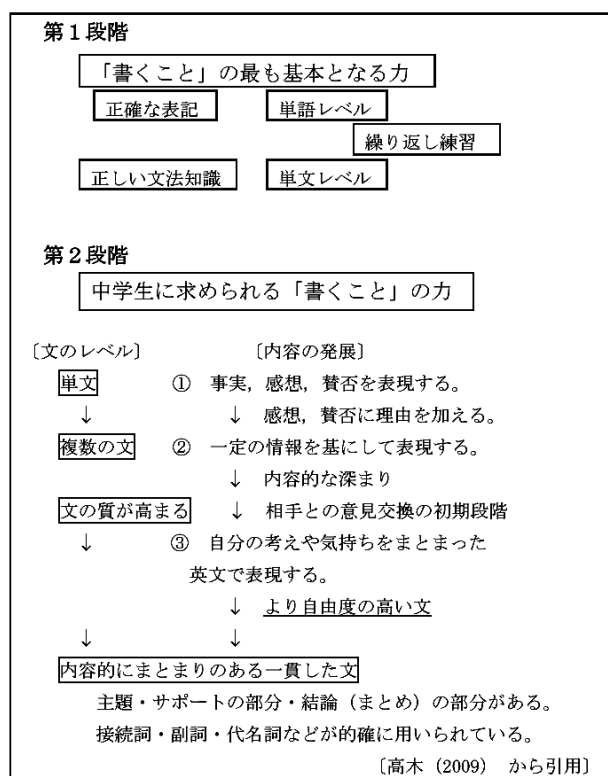
新中学校学習指導要領の外国語の目標は、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。」と設定されている。そのため、中学校では、四つの技能を総合的に育成する指導を充実させ、「聞くこと」や「読むこと」を通じて得た知識等を活用して、「話すこと」や「書くこと」を通じて発信できるように、これまでの指導を修正、改善していくが必要になる。また、今回の学習指導要領の改訂では、自分の考えなどを相手に伝えるための発信力、コミュニケーションの中で基本的な語いや文構造を活用する力、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力などの育成が重視されている（文部科学省 2008）。このことを念頭に置いて指導計画を作成することが大切である。

#### (2) 長期的な視野に基づいた各学年の目標設定

新中学校学習指導要領は、従来どおり各学年の目標を示していないため、各学校が生徒の実態に応じて各学年の目標を設定し、適切な指導計画を作成する。その際、例えば、「書くこと」の領域では、平井（2008）が、「生徒に英文を書く力をつけるためには、長期的な視野で、生徒の学習状況を配慮しながら、段階的に到達水準を設定し授業を行うことが求められる」と述べているように、長期的な視野に基づいて指導計画を作成することが大切である。また、高木（2009）は、新中学校学習指導要領の言語活動の指導事項に基づいて、「書くこと」の様々な言語活動の関連を第 1 図のようにまとめている。

1 カリキュラム支援課 指導主事

第1段階は、3年間を通して繰り返し練習すべき内容である。第2段階は、①～③の段階を各学年の状況に応じて取り組むことが可能であり、3年間で①から③に至る段階を循環的に取り組みながら、最終的に内容的にまとまりのある一貫した文章を書くことに至るまでの指導を示している。



第1図 「書くこと」の言語活動の関連

この図は、3年間を通して繰り返して練習すべき基礎・基本となる事項と目標に向けて段階的に指導すべき事項を整理することで、3年間の指導内容を簡潔に示している。教員間で長期的な目標に向けた指導事項を共有する際に有効なモデルと考えられる。

### (3) 言語活動と一体化した文法指導

新中学校学習指導要領では、文法については、コミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行うよう改善が求められている。

Larsen-Freeman (2003) は、“being able to use grammar structure does not only mean using the forms accurately; it means using them meaningfully (semantics) and appropriately (pragmatics) as well.”

(「文法を使えるということは、正確に形式を使えることだけではない。それは、形式に意味を持たせ適切に使うことでもある。」筆者訳) と述べ、文法指導の概念的枠組みとして Form (形式)、Meaning (意味)、Use (使用) の三つの次元を関連付けている。また、Ehara

(2004) は、“Students must be given opportunities in which they can achieve accuracy and appropriateness through meaningful interactions.” (「意味のあるやり取りを通して、生徒に正確さや適切さを実現で

きる機会を与えなければならない。」筆者訳) と述べている。このように、文法指導を言語活動と効果的に結び付けるためには、学習する表現を、意味に関係なく機械的に文法的操作をするのではなく、適切な言語の使用場面の中で意味のある言葉として使うことが重要である。

さらに、意味のある言葉のやり取りを行わせるためには、意味を音声に乗せる指導が重要である。久保野(2007a) は、生徒の話す英語を聞いていて、意味がすんなりと頭に入ってくる場合と、そうでない場合との違いの原因が、「意味を伝える」という意思を明確に持っているかどうかにあることを指摘し、意味を音声に乗せる音読指導が必要であるとしている。このことから、生徒のコミュニケーション能力を高めるためには、コミュニケーション活動だけではなく、意味を伝えることを意識した音読指導なども重要であるといえる。

### (4) 授業時数の増加

授業時数は、各学年 105 時間から 140 時間に増えている。1 週当たりになると 1 時間増となる。松沢 (2009) は、PPP モデルという指導手順を例に挙げ、増えた時間を活用するための方向性を提示している。PPP モデルでは、導入 (presentation)、練習 (practice)、運用 (production) の最初の二つの P が習得学習で、最後の P が活用学習ととらえることができる。しかし、これまでは、授業時間が不足し、最後の運用の P が十分ではなかった。今回の学習指導要領の改訂で授業時数が増えたことで、この運用の P を充実させることが可能になる。言語材料についての知識や理解を深める基礎的・基本的な言語活動から、それらを活用して考えや気持ちなどを伝え合う言語活動までを十分にを行い、言語活動を充実させることが求められる。

### (5) 指導する語数の増加

コミュニケーションを内容的に充実したものにするために、指導する語数は従来の「900 語程度まで」から「1200 語程度」に増加する。また、新中学校学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取扱い」に、「語、連語及び慣用表現については、運用度の高いものを用い、活用することを通して定着を図るようにすること。」とされており、語いの指導においては、単語などを生徒に活用させる場面を設定し、内容の豊かなコミュニケーションを行わせることが重要となる。

以上のように、これからの中学校の英語教育は、4 技能を統合的に活用する力を身に付けさせるために、基礎的・基本的な言語活動及びそれらを活用した言語活動の充実を図り、目標に向けた段階的な指導をしていくことが求められる。その際、発信力の育成などの重点事項を踏まえておくことが必要である。その上で、第1学年のときから、単語や表現及び文法事項は、コミュニケーションの中で活用させることを意識し、具体的な場面や状況を設定し、意味のある内容豊かなコ

コミュニケーションを行わせていくことになる。

## 2 小学校英語活動を経験した児童・生徒の姿

### (1) 小学校からの報告

小学校英語活動で養われるコミュニケーション能力の素地は、「言語や文化に対する体験的な理解」「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」「英語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」を指す。ここでは、これらの視点から、神奈川県立総合教育センターが行ってきた小学校英語活動の調査研究で報告された児童の主な姿を整理する。(下線は、筆者。)

#### ○言語や文化に対する体験的な理解

・「いろいろな英語活動を通じて、日本語や英語のおもしろさに気付いた。」(神奈川県立総合教育センター 2009 p. 1)

#### ○積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度

- ・「自分が英語を使うだけでなく、相手の反応が返ってくることに楽しさを感じている」(香西 2009)
- ・「授業中、会話をする児童のそばに寄り添い助ける姿や、一人でいる児童に積極的に話しかける児童の姿が見られた。」(小林 2007)
- ・「分からない英語があっても、担任や外国語指導助手(ALT)のジェスチャーなどを見ながら聞こえた英語の内容を理解しようとしている。」
- ・「英語活動で行うゲームなどを通して児童の間に新たななかかわりが生まれた。」
- ・「英語活動の時間だけではなく、普段からいろいろな友達に進んで話しかけるようになった。」(以上、神奈川県立総合教育センター 2009 p. 1、5)

#### ○英語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ

- ・「英語に対して抵抗感がなく、ALTや外国人に積極的に英語を使って声をかけている。」
- ・「外国の人と触れ合ったり英語を聞いたりする活動に抵抗がなくなった。」(以上、神奈川県立総合教育センター 2009 p. 1、5)

#### ○その他

- ・「『英語で友達と話すのがとても楽しい。』『もっと英語を覚えていろいろなことを英語で言えるようになりたい。』など意欲的な感想があった。」(鈴木 2003)
- ・「自分の思いを伝えるために、新しい英語を知りたいという児童が出てきた。」(神奈川県立総合教育センター 2009 p. 5)

小学校からは積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度にかかわる報告が多く見られた。これは、小学校英語活動の重点が、友達とのかかわりを大切に活動を通して、コミュニケーションを積極的に図ろうとする態度の育成に置かれているためと考えられる。また、小学校英語活動を通して、児童が英語学習への意欲を持つようになってきていることも分かる。

### (2) 中学校からの報告

本研究の調査研究協力員から、小学校英語活動を経験した生徒について次のような報告があった。(下線は、筆者。)

#### ○言語や文化に対する体験的な理解

- ・ほとんどの生徒が、英語による簡単な指示を理解できる。
- ・単語をよく知っており、I like を用いた表現などに慣れ親しんでいる生徒が多い。

#### ○積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度

- ・英語で積極的にあいさつをし、教員が話す英語の内容を類推しようとする態度が見られる。
- ・英語で発表することに積極的に取り組み、友達が話す英語を理解しようとしている。
- ・コミュニケーション活動のときに自信を持って英語を話している。

#### ○英語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ

- ・Is that は「イズダッ」、T-shirt は「テエィーシャー」のように、聞こえたまま単語にカタカナでフリガナをふっている生徒がいて驚いた。
- ・英語らしく発音しようとする生徒が多い。
- ・強勢やイントネーションを付けて英語を話したり読んだりしようとする。
- ・英語に対する抵抗感がなく、英語を聞いたり話したりすることに慣れている。
- ・以前なら、いきなり話す活動をするのは難しかったが、今の入学生は堂々と英語を話すので小学校で英語に慣れていることの成果が表れていると感じる。

#### ○その他

- ・いろいろな英語の活動の進め方に慣れている。
- ・英語活動に力を入れている小学校の出身者は、英語を聞き取る力があり、反応が良く、第1回定期テストのリスニングテストでは比較的得点が高い。ただし、2～3ヶ月でリスニング力は、ほかの小学校の出身者と並ぶ。
- ・小学校で英語に対する苦手意識を持ってしまった生徒は、中学校で英語を習得するのに時間が掛かる。

中学校からの報告は、態度面だけでなく、慣れ親しんできた表現やリスニング力という点にも及んでいる。一方、小学校で既に英語に対する苦手意識を持っている生徒に関しても報告されており、この点についてもこれからの中学校第1学年の英語指導を考えていく上で検討する必要がある。

### (3) 質問紙調査の結果から

本研究では、県内の四つの中学校の協力を得て、第1学年を対象に英語についての質問紙調査を実施した。実施時期は、平成21年10月～11月で、回答数は248であった。なお、質問紙は、湯川他(2009)と国立教育政策研究所(2009)の調査研究報告を基に作成した。

ア 英語学習に関する意識

英語に対する意識にかかわる質問への回答結果は、第1表に示すとおりである。

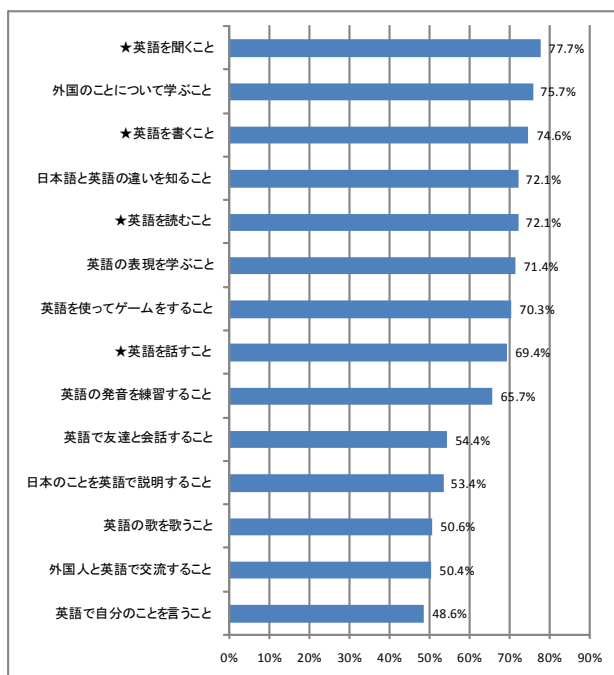
第1表 英語に対する意識とその割合

英語に対する意識	割合
英語が好きだ	69.0%
小学校の英語の授業が好きだった	60.3%
英語の勉強は大切だ	81.5%
英語が使えるようになりたい	85.0%

英語が好きで生徒の割合は69.0%で、小学校の英語の授業が好きだった生徒の割合よりも高い。しかし、「英語の勉強は大切だ」「英語が使えるようになりたい」と思っている生徒ほど多くはない。

#### イ やってみたい学習活動

第2図は、中学校でやってみたい学習活動である。



第2図 中学校でやってみたい学習活動

まず、4技能(★)だけで見ると、「聞くこと」に意欲的な生徒が最も多く、次に「書くこと」「読むこと」「話すこと」の順となっている。4技能以外のやってみたい学習活動の上位は、「外国のことについて学ぶこと」「日本語と英語の違いを知ること」である。「英語で友達と会話すること」「英語で自分のことを言うこと」などの発話を伴う活動は下位である。小学校高学年になると、児童は英語を話すときに間違えたり上手にできなかったりすることに不安を覚えるようになるが、中学校第1学年でも同様の傾向があると考えられる。

#### ウ 英語が好きな生徒と嫌いな生徒

英語が好きな生徒と嫌いな生徒でそれぞれの活動に対する意欲を見た。

4技能に対する意欲を見ると、英語が好きな生徒の80%以上が4技能すべてに意欲的であった。英語が嫌いな生徒は約63%が聞くことに意欲を示したが、話す

ことに意欲を示したのは40%弱であった。個別の活動のうち、「英語で友達と会話をすること」と「英語で自分のことを言うこと」に意欲を示した生徒の割合は、英語が好きな生徒の60%~70%、英語が嫌いな生徒の10%~30%であった。このことから、英語を聞くことには比較的多くの生徒が意欲的であることと、英語を話すことには英語が好きと回答した生徒でも意欲的な生徒の割合が少なくなることなどが分かった。英語を話すことに難しさや負担などを感じていることがうかがえる。

#### エ 各活動間の相関

表計算ソフトのPEARSON関数を用いて、英語学習に対する意欲や各活動間の相関係数を算出した。その結果、英語は大切だという思いよりも、好きだという思いの方が学習活動への意欲との相関が高いことが分かった。また、4技能間、各活動間の相関はかなり高かったが、「英語を使ってゲームをすること」は、ほかの活動とやや相関がある程度だった。これらのことから、様々な活動を行うことは、生徒の学習意欲を維持したり高めたりすることに効果があることが期待できる。ただし、英語でゲームをすることは、生徒の意識の中で学習活動と結び付いていないと推測されることから、英語でゲームをする場合は、その目的を明示したり、ゲーム終了後に何ができるようになったかを振り返らせたりする必要があるだろう。

#### オ 小学校英語活動が好きだった理由・好きではなかった理由

小学校英語活動が好きだった理由として、「いろいろな英単語を知ることができて楽しかった」「自分も英語で話せたことがうれしかった」「英語でフルーツバスケットなどをしたことが楽しかった」などの記述があった。「知る」「できる」という体験や楽しい活動を通して小学校英語活動が好きになることがうかがえる。

また、好きではなかった理由として、「発音や聞き取りがうまくできなかった」「できる人とできない人の差が激しかった」「細かく英語を教えてもらえなかった」などの記述があった。このような理由から小学校英語活動が嫌いになる可能性があることが分かる。

#### カ 英語に対する体験的な理解

約64%の生徒が、小学校英語活動を通して言葉の面白さなどに気付いた経験があった。生徒の記述を見ると、日本語と英語では、音声、文字、単語、語順などに違いがあることを小学校で体験的に理解していたようである。生徒が記述したことの一部を次に示す。

- ・英語を初めて聞いたとき、日本語とぜんぜん違うので驚いた。
- ・日本語は「～がどうした」なのに、英語は「どうした、～が」になる。変なのと思った。
- ・日本語と比べて、主語や動詞をすごく大切にする。
- ・英語にも熟語があった。

・「パン」は英語ではなく、英語では「ブレッド」ということを知って驚いた。

#### (4) 国立教育政策研究所の調査研究から

「平成20年度『小学校における英語教育の在り方に関する調査研究』成果報告書」（国立教育政策研究所2009）のうち、第6学年の児童にかかわる内容を概観する。この報告書で示唆された諸事項は、小学校英語活動の現状を一般化したものではないが、小学校英語活動を経験した生徒の傾向を推測する上で有効であると考えられる。

ここでは、児童が小学校で「聞くこと」「話すこと」を中心に学習してくることと、小学校英語活動を通して英語学習への意欲を持つようになることから、リスニングとスピーキング及び意欲に関する調査研究報告を見ていく。

##### ア 「リスニングに関する調査研究」から

「リスニングに関する調査研究」では、ほとんどの児童が基本的な語いを理解できているが、概要理解問題は最も正答率が低かったと報告されている。困難度の高かった問題は、単語・句・文単位で音声の流れる問題よりも、2文以上の音声の流れる問題、自分で応答を選んで答える問題であった。このことから、中学校入学時には、多くの生徒が基本的な単語を聞き取ることにはできるが、まとまりのある文を聞いて理解することには困難を感じると予想される。

##### イ 「スピーキングに関する調査研究」から

「スピーキングに関する調査研究」では、英語で発せられた質問に児童がどの程度適切に返答できるかを見た。名前、色、あいさつ、動物、天気などの質問への正答率は高いが、“What do you want to be?” “How much is this bag?” “What subject do you like?” “How much is this ball?” “What subject is this?” などの質問は、正答率が低かった。このことから、中学校入学時には、名前、色、あいさつ、動物、天気などは、単語を発話できるぐらい慣れ親しんでいる生徒が多いと推測される。ただし、小学校によってそれぞれの題材の扱い方が違うため、単語への慣れ親しみの度合いは異なることが予想される。

##### ウ 「児童の意欲と指導形態に関する調査研究」から

「児童の意欲と指導形態に関する調査研究」の報告では、「英語が使えるようになりたいか」という質問に肯定的な回答をした児童は76.7%、「英語の授業が好きか」との質問に肯定的な回答をした児童の割合は66.2%であった。このことから、中学校入学時には、多くの生徒が英語が使えるようになりたいという気持ちを持っているが、既に英語が好きではない生徒も一定数いることが予想される。

#### (5) 中学生の英語の学習意欲を促進する要因

次に示すのは、中学生の英語学習意欲を促進する要因（小池他 2006 p.39）の上位10項目を順に並べた

ものである。

「テストでいい点がとれた」「授業で習ったことがよくわかった」「おもしろい英語の先生に教わった」「英語で書かれたものを読んで内容がわかった」「文法がわかるようになった」「受験のためになる授業」「英語で言いたいことがうまく書けた」「英語の先生にほめられた」「人生のためになる授業」「英語を聴いて意味がわかった」

中学生の英語の学習意欲を促進する要因は、成功・理解要因や教師要因の比重が高く、受験などの進路・生き方要因は上級生を中心に高い率を示していると考えられる。

阻害要因としては「英語の先生にしかられた」「授業で習ったことがよくわからなかった」「テストで悪い点をとった」が上位に位置している。中学生にとっては「できなかった」という不成功体験や、「よくわからなかった」という理解困難体験が意欲の喪失につながりやすい（小池他 2006 p.51）。

このような特徴を踏まえ、小池他（2006 pp.61-62）は、中学生の指導には、豊富な機械的練習、生徒に不安感を抱かせないクラスの雰囲気作り、ねらいを明確にした学習活動などが有効であるとしている。ただし、豊富な機械的練習については、言語活動と一体化した文法指導という視点から、意味のある言葉のやり取りを意識して指導することが大切である。

学習意欲を促す指導例を二つ紹介する。ある中学校では、フラッシュカードで新出単語の発音練習をする際、生徒が知っている単語や、つづりから発音を推測しやすい単語を入れておくことで、生徒が意欲的に取り組む態度が見られた。また、別の中学校では、筆記テストと音読などの音声テストを実施しているが、生徒の中には「音声テストはできたけれど、筆記テストはできなかった」という生徒がいる。その場合、音声テストの結果を褒めて、次の筆記テストでがんばるように励ますなどの指導をすることで、生徒の意欲を維持しているとの報告があった。このような指導は、英語学習を促進する要因と合致していると考えられる。

### 3 中学校英語の入門期指導の実践

小学校英語活動を経験した生徒は既に中学校に入学してきており、小学校英語活動を踏まえた指導は始まっている。そうした事例のうち、8例を紹介する。事例1と2は言語や文化に対する体験的な理解をいかした事例、事例3と4は積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度をいかした事例、事例5は英語の音声や基本的な表現への慣れ親しみをいかした事例、事例6と7は学習意欲をいかした事例である。事例8は長期的な目標に向けた指導の事例である。

#### (1) 事例1

生徒は既に Do you like...? の表現と意味を理解し

ていることから、この表現を利用して、**favorite** を使った表現を導入していた。活動全体を通して、チャンツやクイズなどの小学校で慣れ親しんできた活動を取り入れたり、コミュニケーション活動の中で「コミュニケーションを円滑にする表現」を使わせたりすることで、生徒は楽しそうに活動に取り組んでいた。

#### (2) 事例 2

生徒は既に **This is...** の表現と意味を理解していることから、この表現が人を紹介するときにも使えることに気付かせたり、**Is this...?** の形を理解させたりすることが無理なくできていた。この表現を用いて、自分が持っているカードの絵を描いた人を探す活動に生徒は意欲的に取り組んでいた。また、この活動の中で、相手の絵を褒める表現を使わせることで、生徒は楽しくコミュニケーション活動を行っていた。

#### (3) 事例 3

生徒に英語でコミュニケーションを図ろうとする意欲があることから、授業者は、自身と生徒及び生徒同士のやり取りを意識して、生徒に英語をたくさん聞かせたり、英語を話す機会を与えたりしながら授業を進めていた。その中で生徒が知っている単語を把握し、その単語を例文などで活用していた。また、自己紹介をインタビュー形式にすることで、生徒同士がやり取りをする機会を設けていた。生徒は、多くの友達にインタビューを行う中で繰り返し同じ質問をするため、英語で質問するタイミングが次第に良くなり、滑らかに言えるようになっていった。

#### (4) 事例 4

授業者は、生徒が初めて聞くハンバーガー店での店員と客の対話文を、メニューやドリンクなどの小道具を使って聞かせていた。生徒には、英語を聞いて理解しようとする態度が見受けられ、授業者の英語をしつかりと聞いていた。題材が身近で、小道具を使っていたことから、対話文の内容が推測しやすくなり、生徒は聞いた内容をよく理解していた。全体で対話文の音読練習を十分行った後で、対話文を暗唱して発表するという目標を与えると、生徒はペアになって意欲的に音読練習に取り組んでいた。

#### (5) 事例 5

授業者は、小学校で生徒が慣れ親しんできた単語を使い、単数形や複数形の単語を繰り返し聞かせることで、複数の形式に気付かせていった。その後、授業者が複数の概念や形式を簡単に説明してから、口頭練習や書く練習を十分に行わせると、生徒は複数の概念や形式について理解を深めていった。

#### (6) 事例 6

4月に自己紹介を英語5文で書かせたが、生徒が大変意欲的であったため、2学期は自己紹介を10文で書かせていた。その際、生徒の負担が大きくなることを予想し、和英辞典を用意し、ティームティーチングの

ときに自己紹介を書かせるなど、十分な支援体制を整えた上で実践していた。

#### (7) 事例 7

グループで自己紹介のスキットを作り発表する活動を行っていた。スキットは部活動に触れることになっており、生徒は意欲的に英語の台本を書き、それを読む練習をし、覚えて発表をしていた。聞いている生徒も、発表内容をよく理解していた。また、この事例では、英語学習の長期的な目標に向けて、グループ活動を通して英語を学び合う場面を作り出したり、プレゼンテーションスキルを意識した発表をさせていた。

#### (8) 事例 8

第1学年のときから教科書以外の文を積極的に読ませてきた。ただし、まとまった文章を読むと時間が掛かることと、既に英語に苦手意識を持ってしまった生徒がいることから、英文は1文ずつ提示してきた。また、自分が読んだ英文をほかの生徒に伝えるなど、活動に変化を持たせて生徒が飽きないようにしてきた。第2学年になると、初見の英語の文章であっても意欲的に読もうとする生徒の姿が見られるようになった。

### 4 これからの中学校英語の入門期指導

神奈川県立総合教育センターで行ってきた調査研究や中学校での実践などに基づいて、小学校英語活動を踏まえた中学校英語の入門期指導のポイントをまとめた。

#### (1) 小学校英語活動を経験してきた生徒を理解する

小学校英語活動を経験してきた生徒を理解するために、「言語や文化に対する体験的な理解」「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」「英語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」の三つの視点及び「英語の学習意欲」という視点が利用できる。

「言語や文化に対する体験的な理解」は、日本語と英語のどのような違いに気付いているか、単語や表現をどの程度知っているかなどを見て把握する。

「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」は、英語を聞いてその内容を推測しながら理解する態度、言いたいことを言葉やジェスチャーなどを交えて伝えようとする態度、友達とかかわろうとする態度、英語への自信などを見て把握する。

「英語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」は、英語を聞いたり話したりすることへ抵抗がないか、英語を聞く力がどの程度あるかなどを見て把握する。

「英語の学習意欲」は、生徒が様々な英語の学習活動に取り組む様子などから把握することができる。

これらの視点から、学習活動に取り組む様子、提出物の状況、試験結果などを見て、小学校英語活動を経験した生徒への理解を深める。ほかにも、質問紙調査を実施する、近隣の小学校から指導計画や学習指導案を提供してもらう、小学校英語活動の授業を見学させ

てもらふなどの積極的な取組みも期待したい。

また、英語の知識面やスキル面に過大な期待を持って指導を行うことは、小学校英語活動を踏まえた指導とはいえないという点を踏まえておくことも大切である。小学校英語活動では、基本的な表現などの定着を目標としていないため、それらの定着を図る活動や定着したかどうかの確認は行われない。中学校入学時に、既に使えるぐらいに慣れ親しんでいる表現があったとしても、それは小学校英語活動の副次的なものであると理解しておくべきである。そうすることで、英語の知識面やスキル面における、「～は知っているだろう」「～はできるだろう」などという過大な期待に基づいた指導を避けることができる。

#### (2) 小学校英語活動と中学校3年間の目標という視点から第1学年の指導計画を作成する

中学校第1学年の指導計画は、小学校英語活動を踏まえた視点と、中学校3年間の英語学習という長期的な視点に基づいて作成する。特に、現在は、各小学校が新小学校学習指導要領が完全実施される平成23年度に向けて小学校英語活動の授業時数を増やしているところであり、これから中学校に入学してくる生徒は、これまでの生徒と英語への慣れ親しみなどの度合いが異なることが予想される。中学校は、小学校英語活動を経験した生徒の実態やこれまでとの違いなどをしっかりと把握し、中学校での3年間の英語学習の目標を見据えて、指導計画の修正、改善に取り組んでいく必要がある。

#### (3) 言語や文化に対する体験的な理解をいかす

小学校で慣れ親しんできた言語材料に再度触れさせ、それを文字で確認し、文法面などから理解を促して定着を図ることが中学校では大切になる。また、小学校で慣れ親しんできた単語や表現を使うことで、コミュニケーションの内容が豊かになることや、生徒が意欲的に学習活動に取り組むことなどが期待できる。

#### (4) 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度をいかす

小学校英語活動を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育成されてくることが期待できる。そのため、中学校でも早い時期から授業の中にコミュニケーションを行う場面をたくさん設定していくことが望ましい。その際、小学校英語活動と同様にたくさん英語を聞かせることが大切である。また、コミュニケーションを行う場面は、生徒同士のコミュニケーション活動においてだけでなく、教師が生徒に英語でたくさん質問をしたり理解確認をしたりしながら生徒と言葉のやり取りをすることで設けることもできる。また、生徒同士の言葉のやり取りを意識することで、スピーチ形式で行われることが多い自己紹介活動も、インタビュー形式で行う発想が生まれるなどの教師の工夫へとつながる。

#### (5) 英語の音声や基本的な表現への慣れ親しみをいかす

小学校英語活動を通して、生徒は英語の音声や基本的な表現へ慣れ親しんできており、英語の音声への抵抗が少ない。このことをいかすために、中学校入学当初から基本的な英語表現を繰り返し聞かせる。ただし、慣れ親しみの度合いは生徒によって異なると考えられるため、小学校英語活動で慣れ親しんできた単語や表現は全体で確認して思い出させることが必要である。また、発話を伴う活動を生徒に行わせる場合は、事前に十分な発話練習を行ってから自己表現活動やコミュニケーション活動などに移ることが大切である。そうすることで、英語力の差をできるだけ意識させずに済むことも期待できる。

#### (6) 中学校の英語学習への意欲をいかす

英語を使えるようになりたいという生徒が多いので、早い時期から英語の4技能を総合的に育成する学習活動を行うことが望ましい。ただし、「話すこと」には難しさや負担を感じる生徒も多いことを考慮した工夫が必要である。また、「分かった」「できた」「上手になった」などと実感させて、学習意欲の維持・向上を図る工夫も重要である。学習活動の目標を明示したりグループで取り組ませたりすることも、生徒の意欲を引き出すことに一定の効果が期待できる。

「聞くこと」については、小学校で慣れ親しんだ表現を中心に、生徒に理解してほしい単語や表現を繰り返し聞かせることが大切である。その際、言語の使用場面の設定と視聴覚教材やデモンストレーションなどの活用を心掛けることで、聞いた英語の内容を推測しやすくする。また、まとまりのある文を聞いて理解することは難しいと感じる生徒もいると考えられるので、簡潔な表現を用いて英語を聞かせるようにする。

「話すこと」については、英語が好きな生徒でも意欲が低下する傾向が見られることから、段階的な手順を踏み、十分な発話練習を行うことで、自信を持って英語を話せる状態にすることが必要である。例えば、英語をたくさん聞かせて単語や表現の音や意味、文法事項などを理解させたら、学習事項を一度文字で確認する。その後、英語を話す活動へ向けて発音練習、音読練習、文字を見ずに言う練習など段階的に練習を積み重ねることで、生徒が自信を持って英語を話す活動に臨めるようにする。また、言語材料や課題を、負担にならない程度に少しずつ変えて飽きないようにしながら、同じコミュニケーション活動を繰り返し行わせ、次第に上手に話せるようにしていくことも考えられる。

「読むこと」「書くこと」については、意欲的な生徒は多いが、つづりを覚える際に英語学習につまずく生徒も多い。このことから、最初は、音とつづりが一致する単語を中心に指導をして生徒の負担を減らすように心掛ける。また、各個人で音読をさせる際に、読め

ない単語を事前に確認することで全員が個人で音読練習に取り組むことができたという報告や、単語を決められた回数練習したらすぐろくの要領で1目盛り進むことができる「単語マラソン世界一周シート」を用いることで意欲的に単語練習に取り組んだとの報告もある。ほかには、複数の視点から生徒を評価してフィードバックすることも有効と考えられる。

(7) 小学校英語活動からのステップアップを図る

中学校の第1学年では、小学校英語活動で扱った題材の下で言語材料を再度扱うことが大切になるが、小学校と全く同じ活動内容では、生徒の意欲が低下してしまう恐れがある。それを避けるために、活動内容をステップアップさせる。ただし、言語材料は、小学校で慣れ親しんだものに触れさせることから、新しい言語材料の導入は、生徒の負担を考えて調節する必要がある。

題材については、小学校で扱った題材に中学校ならではの内容を加えることでステップアップを図ることができる。例えば、自己紹介で中学校の部活動のことに触れさせるのは題材面のステップアップになる。

コミュニケーションについては、相づち表現や褒める表現を使わせるなどのコミュニケーションを円滑にする表現やコミュニケーションスキルにかかわる指導をすることでステップアップを図る。そうすることで、小学校のときよりも、より自然で生き生きしたコミュ

ニケーションを体験させることができる。

さらに、小学校で慣れ親しんできた単語や表現を読んだり書いたりすることは、そのままステップアップにつながる。また、英語を聞かせる際に、英語の音声の特徴、文法ルールや文構造への気付きを促すこともステップアップになる。

(8) コミュニケーションを意識した文法指導を行う

コミュニケーションを意識した文法指導を行う場合、英語を聞かせて文法事項に気付かせることから始める。その際、生徒はまず聞いた英語の内容を理解しようとするところから、意識的に英語の形式に注意を向けさせることが必要になる。例えば、単数形と複数形の違いに気付かせる場合に、「どこが違うかよく聞いてください。」と指示することも有効である。英語を繰り返し聞いてもなかなか文法事項に気付かない生徒もいるので、英語が得意な生徒に合わせて授業を進めることがないように心掛け、気付いてほしい部分を強調したり、教師の後に続いて英語を言わせたりする。

十分に英語を聞かせて、生徒が文法事項に気付いたら、簡単な解説の後で口頭練習を行い、理解を深めさせる。口頭練習を十分にしておく、授業の最後に文法事項を書いて確認させたり練習させたりする際に、生徒がスムーズに取り組むことができる。

口頭練習は、第3図に示した指導例のように、手元にあるものや教室にある身近なものを利用して、自

指導例	
①	視聴覚教材や実物を活用しながら、“This is ...” という表現を繰り返し聞かせる。 教師：(自分のペンを見せて) Look. This is my pen. This is my black pen. : (別のペンを見せて) This is my red pen. : (生徒のペンを借りて) Is this my pen? [生徒 No.] : (自分の教科書を見せて) This is my textbook. : (生徒の教科書を借りて) Is this my textbook? [生徒 No.]
②	生徒に自分の持ち物を持たせて、それを見ながら “This is ...” というように指示する。 教師：自分のペンを持って言ってください。This is my pen. [生徒 This is my pen.]
③	手に持つ物をいろいろ変えて、それを見ながら “This is ...” というように指示する。 教師：This is my textbook. [生徒 This is my textbook.]
④	ペアを作り、自分の持ち物を持って “This is ...” という表現を言わせる。強勢の位置が変わることで、意味がどのように変わるかを考えさせる。 教師：Make pairs and say, “This is MY red pen.” [生徒 This is MY red pen.] THIS is my red pen. [生徒 THIS is my red pen.]
⑤	my を your に変える練習をしてから、手に持つ物をいろいろ変えてペアで練習させる。 生徒1：(自分と相手の消しゴムを持って) THIS is my eraser. This is YOUR eraser. 生徒2：(消しゴムを指さして) Yes. This is YOUR eraser. And THIS is my eraser.
※ 大文字の単語は強勢を置く部分。	

第3図 This is... の指導例



分のことを言わせたり、ペアになって自分や相手のことを言わせたりすることで、意味のある発話をしながら行うことができる。また、相手に意味を伝えることを意識させるために、口頭練習のときだけでなく、音読練習においても強勢などを意識させて、意味を音声に乗せる読み方を指導することが重要である。

#### (9) 学習方法を指導する

中学校の英語学習を始めるときに、授業のルール、教科書の扱い方、ノートの取り方などを指導することは大切である。また、家庭学習や英語の勉強方法などについても指導が必要である。このような指導を通して、中学校でどのように学習するかをイメージさせ、中学校の英語学習は小学校英語活動とは違うことを認識させる。

家庭学習の指導には、宿題を出すことも有効と考えられる。「平成 20 年度神奈川県公立小学校及び中学校学習状況調査 結果のまとめ 中学校」（神奈川県教育委員会 2009）によると、中学校第 2 学年のデータではあるが、「宿題ができれば、宿題をする」という生徒の割合が 80.8%であった。これらの生徒については、宿題を出すことで、家庭学習を習慣付けることに一定の成果が期待できる。ただし、家庭での英語学習は、授業中に学習方法を説明し、十分に練習をさせて学習方法を身に付けさせることが大切である。久保野（2007 b）は「授業で保障すべき物は何か。それは、正しい学習方法を身につけさせることだと考える。学習したことを身につけるためには、練習する以外に方法はない。しかし、限られた授業時間だけでは練習時間を充分には確保できない。やはり家庭での自主練習は不可欠である。」とした上で「『復習しなさい』と生徒に言うのなら、どのように復習すれば良いのか、言葉で説明するだけでなく、実際に体験させて身体で覚えるまで授業で丁寧に練習させたい。」と述べている。学習方法を授業の中で丁寧に指導することで、家庭学習の習慣が身に付いていない生徒も家庭で勉強してみようという気持ちを持つことが期待できる。

#### (10) 中学校入学当初の指導内容を見直す

これからの中学校英語の入門期指導を考える際に、これまでの音声中心の指導などの実践をいかすことができることも多い。しかし、中学校入学当初に行われる、英語のあいさつや自己紹介などは、既に小学校で行ってこることから、指導のねらいや活動内容を見直すことが必要である。

##### ア 英語のあいさつ

生徒は、小学校で Hello, Nice to meet you. などのあいさつ表現を学習してくる。そのため、中学校入学当初に英語のあいさつを指導するときは、そのねらいや指導内容を修正する必要がある。例えば、英語のあいさつを学習する際には、英語のあいさつに対する生徒の反応を見て、英語を聞くことや話すことに対す

る意欲、英語表現への慣れ親しみや定着の度合いなどの確認をねらいとすることが考えられる。生徒が英語のあいさつ表現に十分に慣れ親しんできているようなら、新たなあいさつ表現の導入も考えられる。最初の授業は、Nice to meet you. を使う最適な場面となるので、この表現を使って生徒の反応を見たい。

##### イ 教師の自己紹介

多くの生徒は、小学校で英語の自己紹介を経験し、自己紹介で用いる表現にも慣れ親しんでいると予想される。このことから、最初の授業で教師の自己紹介を英語で行う場合、生徒の英語を聞こうとする態度や理解度などの確認をねらいとすることが考えられる。例えば、小学校で学習した表現を聞かせるだけでなく、写真や実物を見せながら生徒が知らなそうな単語を使ってみることで、英語を聞いて理解しようとする態度を確認できるだろう。自己紹介の途中で Do you like...? や Do you have...? などの質問を生徒にすれば、コミュニケーションを図ろうとする態度なども確認できる。生徒に英語を話したいという気持ちが見られるようであれば、生徒に自己紹介をさせることも考えられる。ただし、すべての生徒が自信を持って英語で自己紹介ができるとは限らないので、話す事項を提示して考える時間を与えたり、使う表現を十分練習させてグループ内での自己紹介から始めたりするなどの配慮が必要である。

##### ウ 教室英語の導入

小学校英語活動を通して、生徒は簡単な英語の指示にすぐに反応できることが期待できる。このことから、どのような英語の指示であれば生徒が反応できるかを確認することが大切である。生徒が知っている英語の指示を把握すれば、早い時期から英語で指示を出す授業が無理なくできる。また、どの教室英語を導入していくかを決める際にも役立つ。

##### エ 文字の指導

小学校では、アルファベットの音と文字が一致するところまで指導が行われることが期待される。このことから中学校では、早い時期にアルファベットの音と文字が一致するかを確認する。文字の指導においては、ローマ字の復習も一定の効果を持つだろう。ただし、小学校ではローマ字の指導に充てる時間数が少ないことを踏まえて指導する必要がある。音とつづりの関係を理解させることも重要である。最初は、生徒が小学校英語活動を通して慣れ親しんできた単語の中から、主に音とつづりが一致する単語を扱い、音とつづりが一致しない単語は少なくしておく。このような配慮をすることで、単語のつづりを覚える難しさを軽減する。

#### 研究のまとめ

これからの中学校英語の入門期指導は、小学校英語

活動を踏まえた視点と、中学校3年間の英語学習に向けた視点から指導計画を作成することが大切になる。小学校英語活動を踏まえた指導計画を作成するためには、中学校の英語教員が小学校英語活動への理解を深めることが不可欠である。そのためには、小学校英語活動を経験した生徒の理解や、近隣の小学校の実践の把握などへの積極的な取組みが望まれる。このような取組みを通して得た情報や理解を基に、中学校の3年間を見通した指導計画を作成し、実際の指導に当たることが小中の円滑な接続につながる。

### おわりに

本稿では、主に神奈川県立総合教育センターで行ってきた小学校英語活動の調査研究に基づき、小中の接続という観点からこれからの中学校英語の入門期指導の在り方について考察を行った。本稿が、これからの中学校英語の入門期指導を考えていく上で、先生方への一助となれば幸いである。

最後に、本研究を進めるに当たり、ご指導・ご助言を賜った久保野雅史先生、ご協力いただいた調査研究協力員の方々及び質問紙調査の実施にかかわっていただいた中学校の方々に厚く感謝申し上げます。

[調査研究協力員]

鎌倉市立深沢中学校	平井 早苗
寒川町立旭が丘中学校	林 ミカ
座間市立西中学校	鈴木 京子
大井町立湘光中学校	岩井 隆豪

[助言者]

神奈川大学	久保野雅史
-------	-------

### 引用文献

- 神奈川県教育委員会 2009 「平成 21 年度『各教科等の指導の重点』中学校」 [http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/ed\\_sien/juten/index.html](http://www.pref.kanagawa.jp/osirase/ed_sien/juten/index.html) (URL は平成 22 年 2 月に取得)
- 神奈川県立総合教育センター 2009 「はじめよう 楽しい英語活動 ～小学校英語活動 進め方のヒント～」 p.1、p.5
- 久保野雅史 2007a 「音読指導を問い直す」(望月昭彦他『新しい英語教育のために一理論と実践の接点を求めて一』) 成美堂 p.155
- 久保野雅史 2007b 「口頭練習の徹底から創造的活動へ(高1・「英語I」)」(樋口忠彦他『すぐれた英語授業実践一よりよい授業づくりのために』) 大修館書店 p.129
- 香西麻理 2009 「伝え合う楽しさを学ぶ小学校英語一学級担任を中心とした授業づくり」(神奈川県立総合教育センター『長期研究員研究報告第7集(平成20年度)』) p.72

- 小林君江 2007 「学ぶ意欲を高める小学校英語一友達と楽しく学ぶ学習活動一」(神奈川県立総合教育センター『長期研修員研究報告第5集(平成18年度)』) p.59
- 鈴木秀和 2003 「自分の思いや願いを伝え合う小学校英語活動一児童が安心して楽しく活動できる支援のあり方一」(神奈川県立総合教育センター『長期研修員研究報告第1集(平成14年度)』) p.76
- 高木晋 2009 「中学校英語科における書く力を高める指導の在り方を探る一『書くこと』の指導段階のモデルの提案一」(青森県総合学校教育センター『研究紀要』 [http://www.edu-c.pref.aomori.jp/kenkyu/2008/d\\_kiyou.html#ky](http://www.edu-c.pref.aomori.jp/kenkyu/2008/d_kiyou.html#ky) (URL は平成 22 年 2 月取得)
- 平井早苗 2008 「『書く力』を伸ばす英語の指導法一効果的な視聴覚教材の活用を通して一」(神奈川県立総合教育センター『長期研修員研究報告第6集(平成19年度)』) p.79
- Ehara, Yoshiaki 2004 *Self-Expression and the Structural Syllabus---Bridging the gap: An Analysis of a Learner Corpus and Journal---*(神奈川県立総合教育センター『研究集録第23集(平成15年度)』) p.38
- Larsen-Freeman, Diane 2003 *Teaching Language : From Grammar to Grammaticing*, Thomson Heinle p.36

### 参考文献

- 神奈川県教育委員会 2009 「平成 20 年度神奈川県公立小学校及び中学校学習状況調査 結果のまとめ 中学校」 p.69
- 国立教育政策研究所 2009 「平成 20 年度『小学校における英語教育の在り方に関する調査研究』成果報告書」 [http://www.nier.go.jp/shoei\\_h20/shoei.html](http://www.nier.go.jp/shoei_h20/shoei.html) (URL は平成 22 年 2 月取得)
- 文部科学省 2008 『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂出版 pp.2-3
- Benesse 教育研究開発センター 2009 「第1回中学校英語に関する基本調査報告書【教員調査・生徒調査】」ベネッセコーポレーション p.74
- 小池生夫他 2006 「英語学習意欲を促進する要因(2)一意識調査の因子分析と項目分析一」共同研究委員会英語小委員会 p.39、p.51、pp.61-62
- 松沢伸二 2009 「『活用する力』を英語科でどう育てどう評価するか」(『指導と評価 2009年4月号』) 図書文化協会 p.35
- 湯川笑子、高梨庸雄、小山哲春 2009 『小学校英語で身につくコミュニケーション能力』三省堂